

はしがき

政権が当事者となる一国内の武力紛争が長期化した時、いかなる国際的な支援がいかんにして提供されるのか。この問いの答えとしてまず思い浮かぶのは、人道支援であろう。それは、紛争や自然災害などの脅威に直面した人々の命を救うことを基本的な目的としており、国際的にも重要な支援と認識されている。メディアでも、食料や水といった支援物資の配布や、それを受け取る人々が大きく報じられている。

しかし、人々の暮らしの営みは続く。武力紛争中であっても、時間の経過とともに生活を再建し、生活に必要な公共サービスを維持、回復し、さらにそれらを支える統治機構も必要である。言い換えると、武力紛争が長びくにつれ、救援を中心とする人道支援だけでは十分ではなくなるのである。実際に、長期化した多くの紛争において、救援活動に留まらない支援が提供されている。本書の主題は、長期化する武力紛争の最中に実施される、幅広い支援にある。

こうした支援は、多方面から研究されている。たとえば軍事介入や調停などの紛争解決の手段と人道支援の関係、さらに紛争後の平和構築、復興支援、開発支援といった広範な領域がその考察の対象である。しかし、武力紛争の最中に人道支援だけではない、多岐にわたる支援がいかん提供され、そこにどのような課題があるのかを総合的に解き明かす試みは、道半ばである。

そこで本書は、人道支援に留まらない様々な支援を序章において「人道的対応」と定義する。そのうえで、長期化・複雑化したシリア紛争を事例として、人道的対応の実践の内実や困難を中心に論じ、冒頭の問いに答えることを試みる。具体的には、シリア紛争の推移を踏まえ、人道的対応に従事した機関の報告書などの一次資料を幅広く収集し、過程追跡法を用いて質的分析を行う。これにより、本書は多様な支援を統一的な視点から理解する視座や、時間の経過の中でそれらが変化していく様態を把握する視座を提供する。個々の支援に着目するだけでなく、それらを俯瞰して理解する必要があるとの認識は、長年、開発支援の実務に従事してきた筆者の経験に基づくものである。

もっとも、武力紛争中の人道的対応を検証するうえで重要なのは、様々な支

援を俯瞰的に捉える視座だけではない。その実践を可能にする条件や制約についても考察する必要がある。この点に関してとりわけ重要なのは、紛争当事者の合意を得ることである。一般に、武力紛争の当事者は敵対する勢力への人道的対応を歓迎せず、妨害することもある。中でも反体制勢力が実効支配する地域における人道的対応には、紛争のもう一方の当事者である政権が行使する主権をいかに尊重すべきかが大きな課題となる。

加えてシリア紛争の場合は、人道的対応を主として実践する欧米諸国とアサド政権が厳しく対立していた。このため、反体制勢力が実効支配する地域への人道的対応だけではなく、アサド政権といかに協働するのかも課題であった。

本書は、人道的対応の実情を総合的に分析することを重視し、アサド政権と反体制勢力のいずれの立場にも偏らないことを心がけている。本書が第1章で提示する概念枠組みは、主権の同意を原則とする古典的な人道主義と、必ずしも主権の同意を前提としない新しい人道主義という、人道主義の2つの潮流である。人道主義の思想にまで遡って概念枠組みを設定し、主権との関わりを分析の視点としたことにより、どの勢力が支配する地域への支援であれ、人道的対応を包括的に捉えることが可能になる。

本書の第2章では、人道的対応の実践に深く関わるシリアの内政や外政、また武力紛争の推移を整理する。本書が事例分析の対象としたシリアは、武力紛争以前には一定程度の経済発展を遂げ、パレスチナやイラクから難民を受け入れていた。しかし武力紛争が長期化するにつれ、シリアは人道的対応の受け入れ国へと転じたのである。そして第3章と第4章では、2011年の紛争の勃発以降、2016年の和平プロセス開始までの人道的対応の実践や課題を、アサド政権が行使する主権をめぐる異なる立場にある、国際連合の人道的対応に従事する機関と欧米諸国を中心としたドナーに分けて、それぞれ考察する。第5章では、2016年の和平プロセス開始から2023年の大地震の発生とそれに対する対応に至るまでの武力紛争の推移や人道的対応について考察し、終章において、以上の議論を総括している。

このように、本書は1事例に特化し、これを詳細な分析の対象とした。しかし、それは人道的対応の理解を深めるための1つの足掛かりにすぎない。武力紛争の性質が1つひとつ異なる以上、本来であれば、より多くの事例分析が欠

かせない。他の紛争における人道的対応の事例の分析，さらにシリアの事例との比較検証は，より適切な人道的対応の実践のための今後の検討課題である。

今日，世界ではいくつもの武力紛争が長期化，複雑化し，また再燃する傾向にある。紛争の被害が拡大し，復興の道の下りも険しさを増すなかで，緊急的な救援を超えた人道的対応を必要とする人々は後を絶たない。武力紛争の終結を待つだけでなく，紛争下の人々の命，そして暮らしや尊厳を守るための方策を多方面から検討することは，国際社会のみならず，私たち1人ひとりの課題でもあるだろう。近年では，日本を拠点とする国際 NGO も武力紛争下で様々な活動を展開するようになった。武力紛争や人道的対応への関心の深まりに，本書が少しでも貢献できるとすれば幸いである。

2025年12月

武藤亜子